

### 3. 木製はきもの類のデザイン開発並びに試作研究

坂本 晃\* 高野あや\*

#### 1. 目 的

日田は数少ない木製はきもの産地であるが、その知名度は高いとはいえ、全国各地の観光みやげ物として、その観光地の名称を入れて販売されるなど、商品グレードの低いものがほとんどである。そのため、日田の木製はきもの産地イメージは低いものと思われる。しかし、今後の産地の発展を長期的展望で考えると、産地イメージの向上は必須課題である。

イメージ向上の手法として最も重要な点は、デザイン及び品質等、グレードの高い商品が産地内で製作されることであろう。当産地においても、今回のバブル崩壊による影響を受けて注文が減少したとのことであるが、そのうち景気が回復するとしても、安価な商品はいずれ輸入品に席卷される恐れが大きい。

そこで、本研究では、現代の生活にマッチし、優れた提案性のあるはきものデザイン開発を行い、業界に提示することによって活性化させることを目的とした。

#### 2. 方 法

##### 2.1 デザインコンセプトの設定

ターゲット、生活場面、キーワード、コンセプト、デザイン特性（形態、イメージ、構造、等）を設定する。

##### 2.2 デザインワーク

##### 2.3 試作

特にベルト及び鼻緒の取り付けの作業性を考慮して、シリコン製足型を作製した。

#### 3. 結 果

##### 3.1 デザインコンセプト

###### (1) Aグループ

ターゲット：30～40代の都会的センスを持ち、仕事等でストレスを感じている人々

生活場面：椅子で生活する人達の足元を想定

キーワード：足裏が気持ちよい足のせ型スリッパ

コンセプト：履いて歩けなくても、足裏が気持ちいい

デザイン特性：ろくろ加工による、ピーナツの殻のような形態に、杉あや塗を施す。

エスニックでクラシックなイメージ。

###### (2) Bグループ

ターゲット：自然を愛し、運動不足を実感している30代後半の男女

生活場面：1戸建て住宅の庭周り、及び近所の自然散策

キーワード：快適歩行と自然観察

コンセプト：歩きやすい木製はきもの

デザイン特性：木地部分を前後2つのパーツに分け、関節に合わせて曲がる構造。昨年は鼻緒式だったが今年はベルト式。エンボス加飾杉材で自然の木目を強調し、塗装及び着色もダンディなイメージで統一。

###### (3) Cグループ

ターゲット：30～40代の都会的センスを持ち、仕事等でストレスを感じている人々

生活場面：フローリングの室内

キーワード：自然、リラックス

コンセプト：足裏は板間感覚

\*デザイン研究室

デザイン特性：木地部分を3つのパーツに分け、歩行に合わせて木地部分が曲がる構造。

カジュアルでナチュラルなイメージ

#### (4) Dグループ

ターゲット：30-40代の人で、バードウォッチングや自然散策を楽しむ男女

生活場面：郊外の新興住宅地で、近代的な建物や公園があり、道路も良く整備された街

キーワード：自然、快適、軽快歩行

コンセプト：屈曲をテーマとしたはきもの

デザイン特性：木製はきものは柔軟性に欠ける欠点があるが、このグループでは木部を前後2つに分割したものを接合して、歩行のための屈曲性や柔軟性をもたせる。ナチュラルでクリヤなイメージ。

### 3.2 デザインワーク

デザインコンセプトをもとに、アイデアの展開、取れん、評価及び設計を行った。

### 3.3 試作

設計に従い7種13点を試作した。

#### (1) Aグループ (写真-1)

現在の分業生産システムが崩壊したときのために、従来の木地加工法から脱却するための1方法として、ろくろ加工によるはきもの木地加工を提案した。また、鼻緒を太くし痛みを感じないようにした。

#### (2) Bグループ (写真-3、4)

木地部分を2つのパーツに分けた下駄を昨年度は開発したが、より現代の生活に合うように鼻緒からベルトに替え、靴下をはいたまま使えるようにした。ジョイント部分にはゴムを使用。

#### (3) Cグループ (写真-2)

木地部分を分割する方式をさらに押し進め、木地を3つのパーツに分けた。ジョイント部分

はゴムを使用し、塗装色とバンドの色を合わせた。

#### (4) Dグループ (写真-5、6)

木地部分を2つのパーツに分け、そのジョイント部分には木部の加工に箱物等をつくるための木組(コーナーロッキングマシンによる加工)を採用した。その結果、歩行性も良くなり、また、量産加工にも適したものとなった。

バンドを取り付けたタイプについては、屈曲の位置等、改良が必要である。

## 4. 考 察

作製したシリコン製足型によって、試作のベルト及び鼻緒の取り付け作業はスムーズに行うことができた。また、足型の作製を通じて、自分の足を客観的に見ることでできた点は大きな収穫であった。

今年度の研究は、昨年度に引続き、木製はきもの「快適性」をさらに高めることを念頭に置いて、デザイン開発に努めた。

木製はきものの快適性を阻害する要素としてはいくつかあげられるが、その最大の要素としては、木地部分に柔軟性のないことである。従来の曲がらない木製はきものは、歩行における足の複雑な動きを妨げるため、限定されたスタイル(ひきずり式サンダル、歯のついた下駄)しか考えられなかった。

木製はきものに木地部分の分割による「屈曲性」を取り入れたことは、足の動きに木製はきものを追随させることが可能となり、快適性を高めることができたことに加えて、新しいスタイルの木製はきもの開発をも可能とするものである。

今後とも、産地の発展に寄与するためにさらに研究を深めるつもりである。

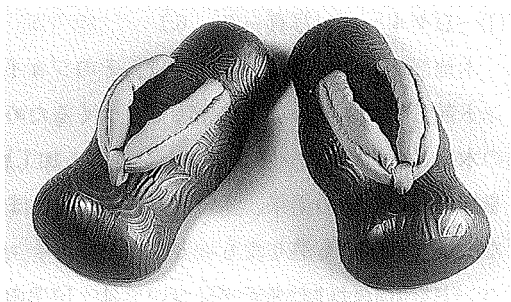


写真-1 Aグループ

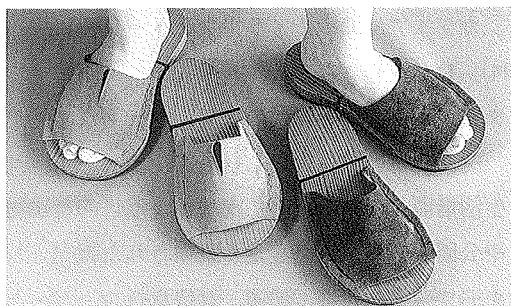


写真-2 Cグループ



写真-3 Bグループ



写真-4 Bグループ、使用状態

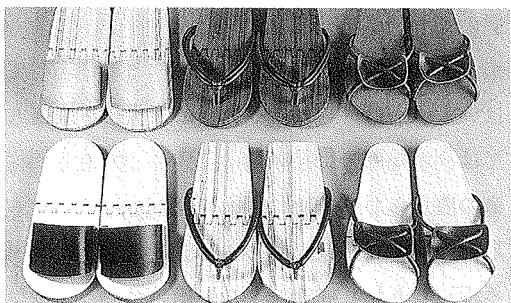


写真-5 Dグループ

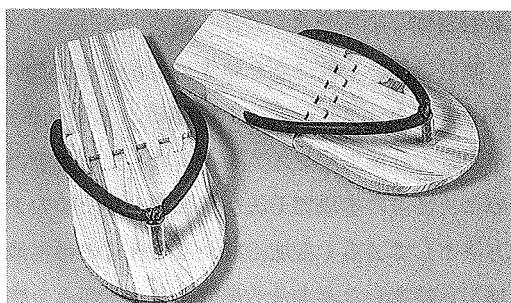


写真-6 Dグループ、木組



写真-7 シリコン製足型



写真-8 足型によるベルト付け